

No	提 案 名	提案団体名	
		代表者氏名	所 属
2	もっと気軽に、もっと身近に 教育施設を利用した宇都宮のスポーツ活性化	帝京大学 山田ゼミ	
		若井 和俊	帝京大学 経済学部
		指導教官 氏 名	山田 耕生

1 提案の要旨

宇都宮市在住の若者が地域愛を持ち、他地域の若者から見て宇都宮市が魅力あるまちであると思える環境づくりをするにあたり、「スポーツを見る・する」という点に絞り、スポーツを「もっと気軽に、もっと身近に」になるようなまちづくりを提案する。

まず、現在のスポーツ環境は宇都宮市内の若者にどう捉えられているのかを明らかにする。スポーツを利用したまちづくりにおいて何が現状において不足し、何が求められているのかを知ること、若者のニーズにマッチしたスポーツ環境をと何かを考える。また若者がスポーツをする敷居を低くし、スポーツに親近感を持たせることでスポーツへの関心につなげるようにする。

現状としては、行政は体育館で行われるスポーツ教室の実施などのハード面の整備やU-SPORTS、宇都宮スポーツナビ等の情報サイトによる情報提供等ソフト面の整備の両方を行っているが、それらは若者のスポーツ参加への気軽さ・身近さの向上につながっていないことがあげられる。なぜなら、スポーツをする施設が基本予約制であり、社会人の若者の帰宅後にスポーツできる環境が宇都宮にはない。特に体育館は利用時間が夜間まで空いている施設が少なく、気軽に利用できる環境ではないといえる。一緒にスポーツをする仲間と出会うきっかけの作りづらさから、スポーツに関心があっても実際に動けない人も多い事が問題ではないかと考えた。

そこで宇都宮市のスポーツ環境が抱える問題を解消するために、私たちの身近に存在する教育施設を利用して、若者がスポーツを気軽に行える場をつくる必要があると考える。それと共に実際にプロスポーツチームの選手を「見る」、そこで実際に活動「する」ことで、プロスポーツチームやプロ選手に対する感動や憧れがスポーツに関する関心や人々の交流を生み、スポーツを通して宇都宮に住んでよかったと思えるようなまちづくりを提案する。

2 提案の目標

現代の若者は積極的な他者との交流を好まない傾向があり、見知らぬ人々との交流の機会を持たないことが挙げられる。これらの点から、スポーツをもっと気軽に・身近に感じられるような環境を作り上げていくことでスポーツ自体の関心や、他者との交流の機会を増やすことで仲間とのふれあいにより生活の質を向上させていくことが目標とする。また、プロスポーツ選手と触れ合う機会を若者が身近に持つことでプロスポーツチームの理解や愛着がより深めることで地域に根差させていく。そして、地域に愛されるチーム選手たちが活躍する姿からさらにスポーツに興味・関心を持ってもらえる環境を創出し、将来にわたって地域が「スポーツを通して」一体感を形成することも目標とする。

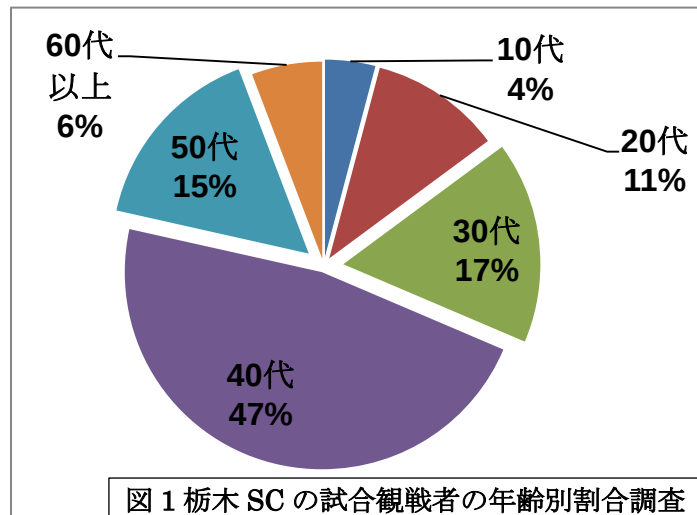
3 現状の分析と課題

3.1 アンケート結果に見るスポーツを「見る」・「する」の現状

①栃木 SC の試合観戦者の年齢別割合調査

10代:13人 20代:20人
30代:57人 40代:19人
50代:7人 60代以上:5人

7月26日(日)、栃木 SC の試合(ホームゲーム)会場である栃木グリーンスタジアムにて試合観戦者を対象としたアンケートを実施し、121人の回答を得た。アンケート回答の結果、栃木 SC の試合の観戦者を年代別でみると、10-20代の年代の若者の割合は約15%という結果だった。試合観戦者の割合として一番多いのは40代であり、試合観戦者の約半数が40代の観客で占められていることがわかる。



②若者のスポーツ観戦・参加についてのアンケート

11/14—15日(土—日)に宇都宮駅で10代—30代を対象としたアンケートを実施した。アンケートでは若者の現在・過去のスポーツの活動状況や、今後スポーツを通じたまちづくりへの期待などを聞いた。以下は設問項目の一部である。

{あなたご自身について、またスポーツ参加についてお答えください}

Q1:一年間に運動やスポーツを行った日数
Q2:好きなスポーツ
Q3:これまで部活、クラブ等で行っていたスポーツ
Q4:これから行ってみたいスポーツ

{スポーツを見る・する環境においてどのような政策を期待しますか(はい or いいえ)}

Q5: スポーツを「見る」「する」環境が増えることについて
Q6:宇都宮市のプロスポーツチームの試合観戦について
Q7: 宇都宮市のプロスポーツチームの試合に関するTV等の放映について
Q8:体育館、グラウンド等のスポーツ施設利用について

(対象者:10-30代の年齢の男女回答者数187名)

(1) 一年間に運動やスポーツを行った回数

週三回以上:54 週 1-2 回:40
 月 3 回:12 月 1-2 回:27
 年 1-3 回:20 運動しない:34

実際に若者のスポーツ頻度に注目してみると週 3 回以上では 29%、週 1-2 回では 21%であり、つまり 2 人のうち 1 人は週に 1 回は運動しているという結果だった。したがって、スポーツが習慣化しているのは若者の半数であるということがわかる。

日常的に「スポーツをしない」層の中には、そもそもスポーツを好まない人・興味がない人と、スポーツをしたいがスポーツを「する」という行動までいけない人々の 2 種類の若者が含まれていると考えられる。一方、積極的にスポーツをしている層は幼いころからスポーツを続けておりスポーツを身近に感じて続けている人や、美容・健康の観点からスポーツをしている若者がいると推測される。

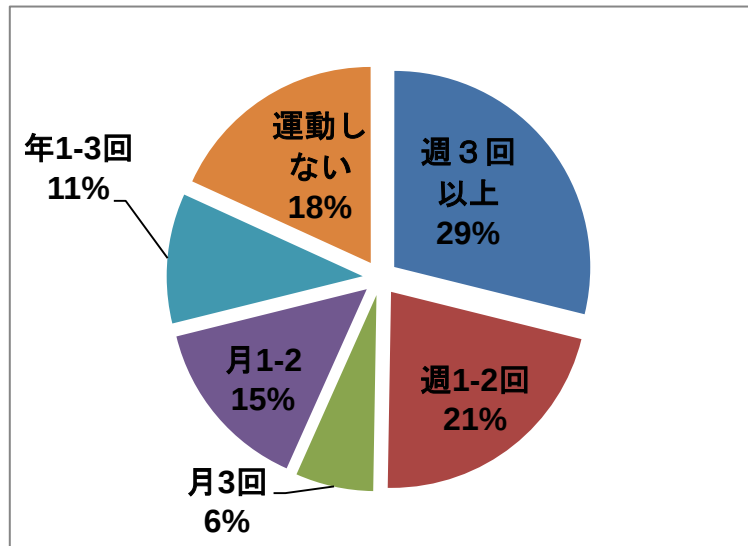


図 2 一年間に運動やスポーツを行った回数

(2) スポーツを「見る」「する」環境が増えることへの関心

増やして欲しい:105 人 このままでいい:61 人
 増やさないでほしい:1 人 関心がない:17 人
 無回答:3 人

アンケート調査の結果から、スポーツを「見る」「する」環境を増やしてほしいと思う若者が 105 人と、56%を占めている。現状の若者の過半数以上はスポーツに対して興味があり、スポーツを「見る」「する」機会の増加には肯定的な意見が多いことがわかる。一方で、61 人、全体の 33%の若者はこのままでいいという回答があるが、この層には自分はスポーツをしないからどちらでも構わないという意見を持つ若者と、数よりも質を重視する 2 種類の若者が含まれていると考えられるが、どちらでも良いということなのであれば施設が増える・質の向上の点において反対の立場では無いというとらえ方もできる。

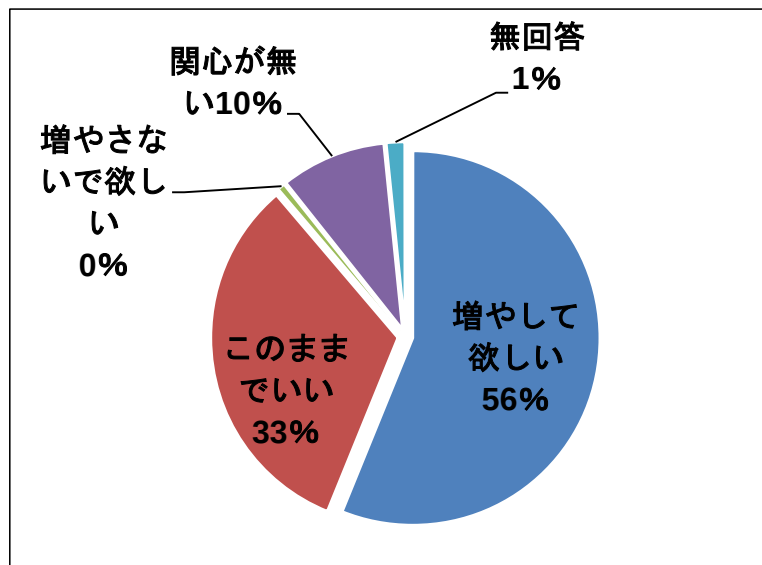


図 3 スポーツを「見る」「する」環境が増えることへの関心

これらから、新しいスポーツ施設を増設することや、見る機会を増やしていくというスポーツ環境の数的な「増加」だけでなく、既存の施設の利便性を高めて、若者が見れるときに見ることができるような、スポーツ環境の「質」の向上や「利便性」なども同時に追求することが必要だと推測される。

（３）宇都宮市のプロスポーツチームの試合観戦について

観戦する:119 人

観戦しない:68 人

プロスポーツチームの試合観戦において、チケットの割引など、試合観戦が観戦しやすくなれば63%が会場へ行くと回答したことから、スポーツを「見る」こと、とりわけ実際に試合会場で試合を「見る」という点において、多くの若者は関心を持っていることが分かった。

したがって、若者はチケットの割引などによる観戦に関する若者の費用負担の削減や、若者が観戦しやすいナイターの試合をよ

り多く開催していくことなど、若者がプロスポーツチームの試合観戦に関してもっと「気軽に」、「身近に」感じられる環境を整えられた場合、プロスポーツチームの試合に若者をさらに呼ぶことができるのではないだろうか。

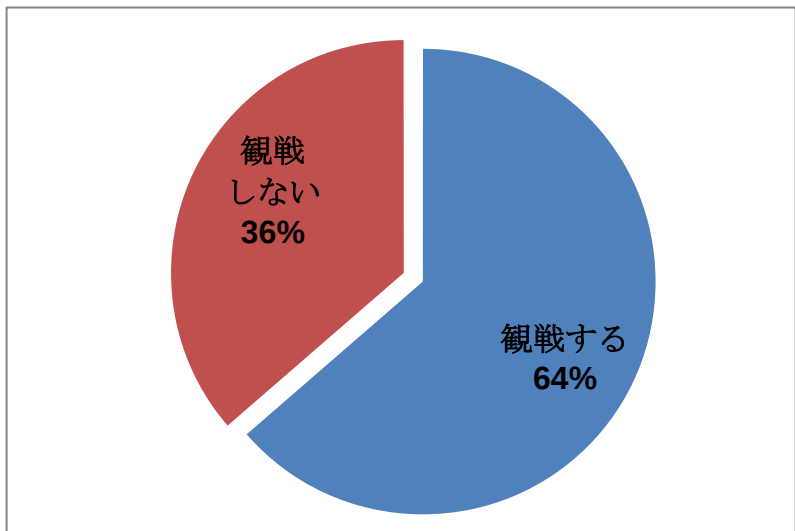


図 4 宇都宮市のプロスポーツチームの試合観戦について

（４）宇都宮市のプロスポーツチームの試合に関する TV 等の放映について

観戦する:118 人

観戦しない:69 人

TV 等でのプロスポーツチームの試合の放映が増えた場合の観戦については、若者の 63%が試合を見るという結果が出た。したがって、試合の観戦において若者はメディアを介して試合観戦をすることにも興味を持っていることがわかる。この要因としては、TV の録画等で時間を気にせず試合を見れること、そして何より自宅で試合の様子を「見る」ことが「気軽に」できるメディアの特徴がこれらの結果に反映されていると言えるだろう。

また、実際の試合会場で観戦すると答えた若者の数と、TV 等の放映でも試合を観戦すると答えた若者の数がほとんど変わらないことから、若者はスポーツを見るにおいては、「見る」時間や金銭的な部分を気にせず見れる「気軽さ」があれば、プロスポーツチームの試合を観戦するきっかけが作ることができるのではないだろうか。

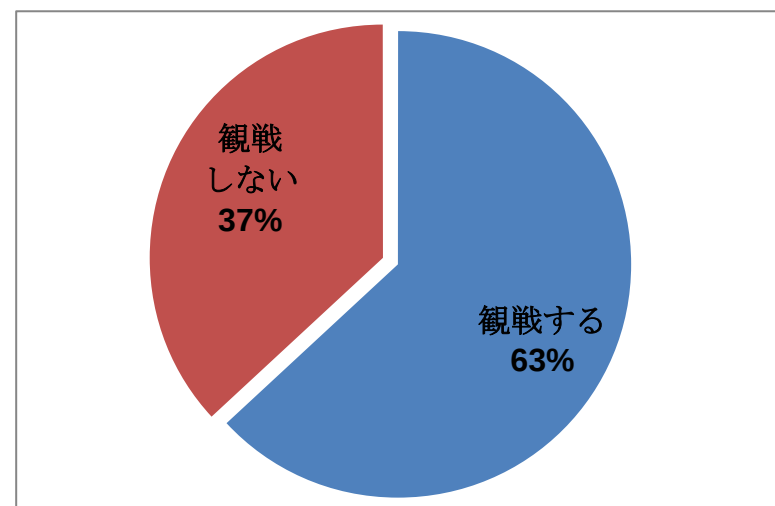


図 5 宇都宮市のプロスポーツチームの試合に関する TV 放映について

(5) 学校等の体育館、グラウンド等のスポーツ施設の利用について

利用する:118

利用しない:69

アンケート調査の結果 118 人の 63%は身近にある学校等の体育館やグラウンド等の更なる開放によって、スポーツ施設の利便性が向上すれば利用するという回答だった。このことから、現状のスポーツ施設の「利便性」に不満を持っており、これがスポーツを「見る」「する」環境の増加の声が多いことにつながるのではないかと。特に、市で運利されている主要な公共体育館を例にとると、市体育館、清原体育館、雀宮体育館、明保野体育館の4つ体育館が存在しているが、これらの体育館の周辺に住む若者で自家用車や公共交通機関で移動しなければ利用できない。

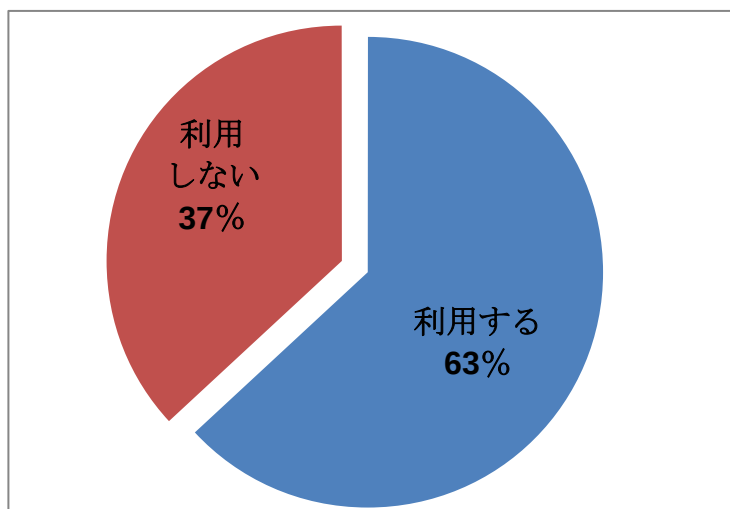


図 6 学校等の体育館、グラウンド等のスポーツ施設の利用について

したがって車を持っていない、または仕事の帰り道に体育館でスポーツをしたいと思う若者にとって、現状の環境は施設を「気軽に」「身近に」利用するという観点での利便性は損なわれていると考えられる。

3.2 スポーツ教室の状況

スポーツ教室は宇都宮市体育館、清原体育館、明保野体育館、雀宮体育館で開催されている。例を挙げると、宇都宮市民体育館スポーツ教室では幼稚園・保育園性や小学生などのジュニア向けの教室から、ソフトヨガやベリーダンスなどの健康・美を目的としたフィットネス系の教室など、女性向けの教室も開催している。これらの教室を開催することで住民が利用するきっかけを体育館が独自に創出し、利用者を増やそうとしている努力もこの利用者数に現れているのだと考えられる。宇都宮市民体育館でこれらの教室について尋ねたところ、これらの教室は申込数が定員数を超えることや、リピーターなども多いということから教室の人気さが窺えた。したがって、これらの「教室」が人々の交流を促すとともに、人々の生活をより良いものになっているということが考えられる。一方で、これらの教室は対象が時間のある青少年や女性向けのプログラムが多く、時間の無い若者や、男性向けの教室が少ないことや、あらかじめの申込が必要な点や定員数が決まっていることから気軽に参加できない問題点も存在している。

3.3 スポーツ団体・チームの現状

サン・カルチャークラブ	スポーツかわち「ship」	友遊いずみクラブ
横川スポーツクラブ	いきいきエンジョイ清原	ジョイスポしろやま
豊郷元気！スポーツクラブ	サンクススポーツクラブ陽東	ちゅんちゅんさわやかスポーツクラブ・雀宮

宇都宮市の総合型の地域スポーツクラブは9団体あり、地域の誰もが加入できるようになっている。これらスポーツクラブでは幼児から高齢者までの幅広い年齢層の人々が活動しており、住民がスポーツに参加する足掛かりとしての機能を持っている。住民自ら自分たちのニーズに合わせたスポーツ活動をすることでスポーツを楽しむことも目的としている。一方で、これらの活動・団体に積極的に加入したいと思える広報や、お知らせが自分たち住民の耳に入ってきていないことが現状として挙げられる。それらのスポーツ団体に元々興味を持

っていた人や世代を超えて交流を深めていきたいと思う若者であれば、人の伝手やきっかけがあれば参加する可能性はあるが、スポーツをしたいと思った人がいたとしてもそれらの団体を自ら見つけ、参加しようとコンタクトをとるのは難しいだろう。特に、若者の場合は積極的な交流は苦手である点からそれらの団体に入るのは敷居が高い。また、これらの情報は他地域から来た・移り住んできた住民に知らせる術がないため、未だに市全体での普及が進んでいないのだと推測する。

3.4 スポーツ情報の提供の現状

宇都宮市のスポーツの情報は U-SPORTS、宇都宮スポーツナビが情報を取り扱っている。U-SPORTS では、サイトにアクセスすることで市内の体育館の空き状況を参照することができ、会員登録することによりインターネット上で施設の利用の予約もできる。また、PC 上ではなくスマートフォン上でもアクセスできることで、スマートフォンを駆使する若者が、利用しやすい環境の整備が行き渡っている

宇都宮スポーツナビでは、宇都宮市のスポーツ情報の掲載や、宇都宮市内で行われているスポーツ情報を検索できるサイトになっている。検索項目が「イベント・大会」、「サークル・同好会」、「施設・場所」、「教室・スクール」、「指導者・コーチ」の大きな分野から選択し、その中から自分の知りたい情報を該当科目に細かくチェックを入れることで、自分の知りたい情報だけを知ることができる。

一方でこれらのサイトは「サークル・同好会」、「教室・スクール」の個別のページをみると、すべての団体が活動写真を掲載しているわけではないので、どんな団体であり、こういった雰囲気なのかのかわかりづらいことも若者を含む利用者がスポーツに興味を持っていたとしても、実際のスポーツに参加につながらない原因となっている。

3.5 スポーツに関する課題

若者の視点で宇都宮市のスポーツを「見る」「する」において現状から分析すると、スポーツを「する」においては、体育館などの「ハード面」は利便性が現状では乏しい。また既存の団体やチームがうまく活用されていない為、スポーツ活動に参加するきっかけがない。

したがって「ハード面」と「ソフト面」の両方に「気軽さ・身近さ」ないことが若者のスポーツ参加の割合が小さい理由であろう。したがって、参加への敷居を低くすることにより、若者にとって「気軽に」「身近に」スポーツが行える環境を整えることが重要である。

このスポーツの「気軽さ・身近さ」を考えていくうえで、浜松市の事例を紹介する。浜松市では「するスポーツ・見るスポーツ・支える（育てる）スポーツ」を三本柱として掲げてスポーツの振興を図っている。浜松市はスポーツをする場として、身近に存在する小中学校に目を付けた。市のスポーツ振興課が中心となって、小中学校のスポーツ施設を子供から大人まで開放し、これらを住民のスポーツ活動の拠点として有効活用することで地域におけるスポーツ活動の活性化を図った。実績としては、平成 23 年度実績は延べ利用者 1,811,109 人、平成 24 年度実績は延べ利用者 1,843,332 人と、H24 年の宇都宮市のすべてスポーツ施設 1,079,660 人よりもそれらの施設だけで利用者が上回っていることから、この「気軽さ・身近さ」が若者のスポーツを「見る」ことはもちろんのこと、「する」ことにもつなげることができれば、宇都宮市全体でスポーツが現在だけでなく将来的にも広がり、住民の間でスポーツがより「気軽に」「身近に」なるのではないだろうか。

また、地域スポーツとトップスポーツのつながりを推進するシステムの構築をスポーツ振興課が行い、地元のトップアスリートの技術や経験を活用して、地域スポーツの活性化や学校体育の充実、次世代アスリートの発掘や育成につながるしくみづくりに繋げている。また、スポーツを通したまちづくりについて、スポーツ推進審議会や関係団体と協議・連携する場を設けつつ推進していくことで、プロスポーツチームと住民が関わりを持つ機会も積極的に作っている。

4 施策事業の提案

現状と課題を通して、若者は視点で見るとスポーツは「気軽さ」「身近さ」が乏しい事が分かった。そこで私たちはスポーツに関心はあるが、「見る」「する」といった行動に繋がられていない若者に着眼点を置き、スポーツを見る・する環境づくりと、それに伴うスポーツの普及をはかるための提案を以下に提示する。

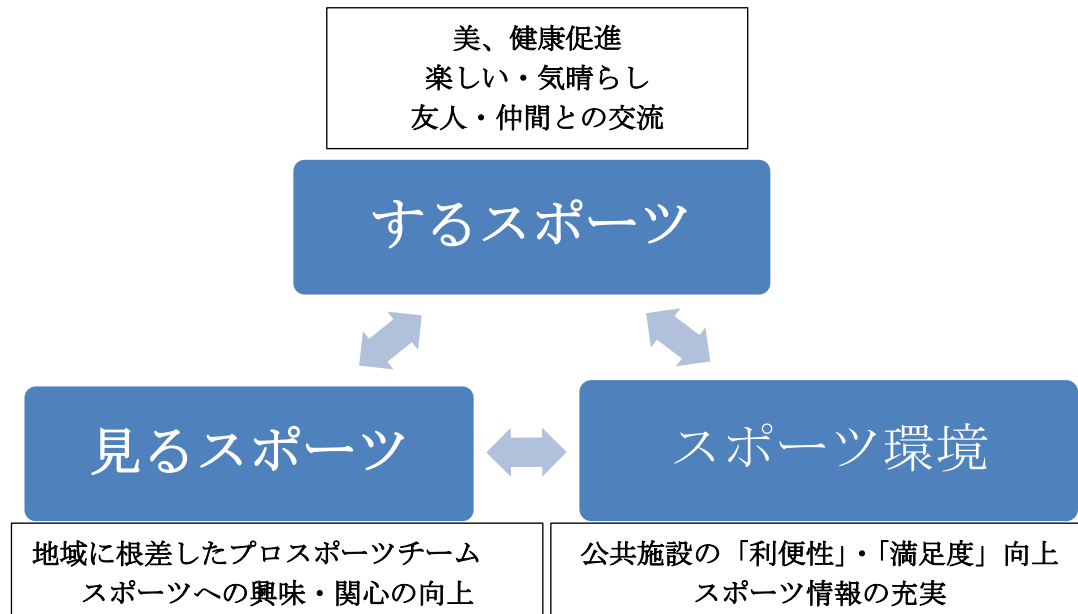


図7 宇都宮市のスポーツの関係性理想図

●教育施設との連携強化

宇都宮市では宇都宮体育館などでスポーツ教室を開催し好評である一方で、女性や青少年以上向けの教室即ち若者の男性が参加しやすい教室というものの提供は少なく、若者の男性がスポーツ教室に参加する機会は現状では少ない。また、体育館は一般開放の時間も設けなければならないという拘束から、新たな層向けの教室（若者男性向け等）の開催が難しい。

これらの負担を軽減・分散させ、より施設が幅広い教室を設けることができるようにするためにも、既存の体育館はもちろん、宇都宮市市内の各小・中・高・大学の運動施設を利用して、これを宇都宮市・各団体のスポーツイベントを開催・または団体やチームの活動の場として利用する。新たな施設の開発による費用を、既存の施設の改修にむけることで費用の負担減少を図る。

これは、イベントを実施することで若者のスポーツ参加を促すとともに、他社との交流の機会の増加を主とし、それによるスポーツを通して人々の生活の質の向上を目指す。また、既存の施設でおこなうことで費用の負担減少・また施設の人々と利用者との交流を生むことも期待される。具体的な提案としては以下の2点を主として挙げる。

① プロスポーツチームの活動の場を提供（見るスポーツ）

学生に目を向け、学校でプロスポーツチームを見る・身近に感じる環境の形成

② スポーツ環境の提供（するスポーツ）

更なる「する」環境の創出として既存の施設を利用

4.1 プロスポーツチームの活動の場を提供

次に、プロスポーツチームの活動の場を中学・高校の体育館などに広げるなど、幅広く活動領域を広げることである。現在プロスポーツチームは小学校を訪れスポーツの教室を開いたりするなどの地域貢献活動をしているが、選手個人のスケジュールの問題もあるためそういった活動に参加するには限界がある。したがって、通常試合に訪れなければ会えない選手をもっと見る・身近に感じる機会の創出として地域貢献活動が行われているわけであるが、その試合や地域貢献活動以外でも選手を見る・身近に感じる機会が増えれば、若者を含めた住民はさらにプロスポーツチームのみならず選手個人も身近な存在となることができるだろう。

私たちは、プロスポーツチームの活動の場を地域の学校等の公共施設にも広げていくことで、より地元根差したチームになるのではないかと考える。学生と積極的に関わりを持っていくことがプロスポーツチームの役割といえる。

地元のプロスポーツチームが実際に学校に訪れて練習することで学生たちは自然とそれらのプロスポーツチームの活動を生で見えるきっかけとなるだろう。早いうちからプロスポーツチーム側からすれば、学校を訪問していつも通りの練習をすることを行うことが自然と住民との交流や地域貢献につながる。学生を含む若者から見れば試合では入れない選手の顔や様子、また練習などのサポートをきっかけとしてさらに選手・チームをより身近に感じるきっかけ増やしていくことができるだろう。

そもそも、学生である若者にとって学校というものは身近な存在であり、様々なことを学ぶ場である。学生である若者が早くから地元根差したプロスポーツチームを実際に見たり・身近に感じることでプロスポーツチームに関心を持つきっかけを作り出していけるだろう。学生が大人になり家族を持った時には、家族単位でプロスポーツチームに対し興味を持つきっかけを作り出していけるのではないだろうか。親から子供へとファン精神が生まれることで、プロスポーツチームが地域により根差したものになると同時にそういったプロスポーツチームがあるという誇りが生まれ、これが宇都宮に住んでいてよかったという地域愛の形成にもつながるだろう。

また、既存の利用されているアプリと提携していくことでよりスポーツチームへの関心を高めていくことができるのではないかと例を挙げると、MONMIIYAというアプリは栃木県のイベントを中心として話題を取り上げているアプリである。情報誌としての機能が備わっているアプリでその情報検索の中で目に入った時に検索したくなるスポーツ情報を掲載することで、若者を含む利用者にスポーツに興味・関心を持つきっかけづくりにつながる。宇都宮のプロスポーツチームの特集として選手の裏顔動画と言う動画を発信することでプロチームに対して実際に会わなくても知る機会を創出することができる。これをきっかけとしてプロスポーツチームの興味・関心を引き起こし実際に「見る・する」という行動につながるのではないだろうか

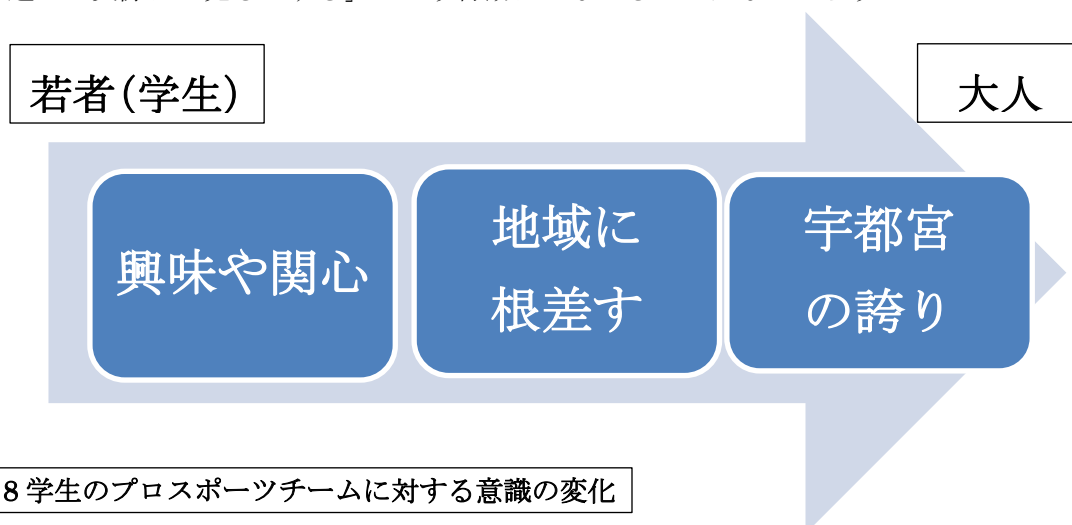


図8 学生のプロスポーツチームに対する意識の変化

4.2 スポーツ環境の提供

まずはじめに、スポーツを「する」において重要なスポーツ環境、すなわちハード面の整備を進めるべきである。宇都宮市の現状から、若者にとってそもそもスポーツをする機会・または場所・きっかけがないことから、スポーツをしたくてもできない・または興味がないといった理由で現在宇都宮市の若者のスポーツに参加する割合は少ないといえる。この機会やきっかけを、宇都宮体育館で行われている「スポーツ教室」を各地域にある学校の体育館などを利用してより身近にスポーツをできる環境を整えていくべきである。社会人の若者をターゲットとして考えると、現在の体育館で行われているスポーツ教室は宇都宮体育館では夜間での教室が行われている一方で、他の体育館では夜間の教室が行われておらず、そうした仕事後にスポーツをする環境が現在の宇都宮市には備わっていない。民間のスポーツジムなどに通うとなると、若者の金銭面的負担は大きく、気軽にスポーツをするということは難しいだろう。こういった若者特有の「金銭面的・時間的問題」を解決するためにも「費用負担が軽く・気軽にスポーツできる環境」を整えて、若者に対してスポーツをするという習慣を根付かせることが行政の役割である。

そのためには、家に近い・職場から近いという利便性も考えていかなければならない。現在の市で運営されている体育館で行われている教室だけでは、それらの体育館周辺にすむ若者の利用に限られてしまう。そこで、地域内に存在する学校の体育館を利用して教室を開催することでより若者の利便性を高めていくことが考えられる。現在宇都宮市の公立学校は中学校25高、高校10校が存在しており、学校の部活動が終わった後であれば体育館の使用はできるだろう。特に、この体育館が普段なら利用されない夜間の時間帯でスポーツ教室等を開催することが出来るようになれば若者はより身近にスポーツをする環境が整えられるだろう。

また、教室として開催することで参加者の意識や技術レベルの差を狭くすることで周りに臆すること無く参加ができるだろう。なぜなら、スポーツ団体・チーム等であれば幅広い競技力、意識等の差があるからである。一方、スポーツ教室であれば初心者レベル・中級者レベルなど対象・目的細かく決めることが出来るため、同じ競技力・意識を持つ人が集まりやすく、実際に活動していても周りと同じレベルであれば活動者は周りを気にせずスポーツを楽しむことができる。これがスポーツをすること本来の「楽しさ」につながり、よりスポーツが身近になっていくきっかけとなるだろう。

教室を通してよりスポーツに興味を持ち、もっと高度なことを行っていきたいと思った時に、このスポーツ団体・チームというのは初めて活用されていくだろう。

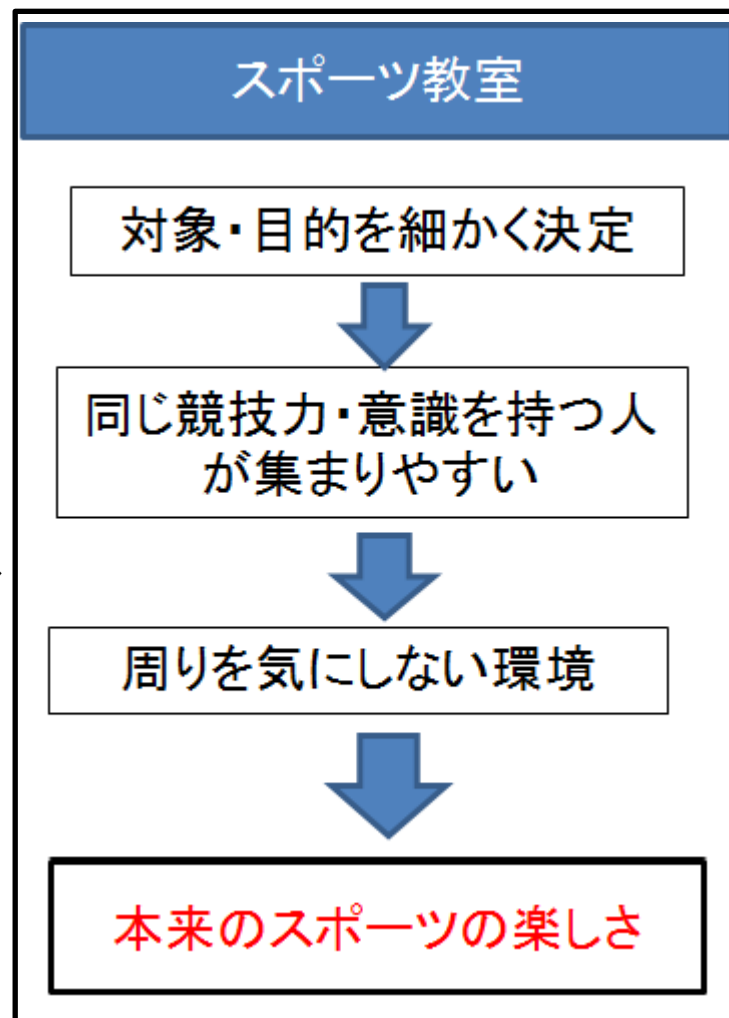


図9 スポーツ教室の目的

したがって、既存のスポーツ団体・チームが団体・チームのみで活動を行うだけでなく、行政主催のスポーツ教室に関わっていくことで若者たちにスポーツ団体・チームに参加したいと思えるような環境を作り上げていくことが既存のスポーツ団体・チームの役割であると考え。スポーツ団体・チームに参加している人たちはスポーツ教室の参加者に指導することで技術や知識向上といったスキルアップだけでなく、プロ選手たちとはまた違う地域の人たちという身近な立場からスポーツの楽しさ・良さを教えることが出来るだろう。これを機にスポーツ教室での活動が終了したとき、そのスポーツを続けたいと考えた人がスムーズにスポーツチームや団体に入ることが出来るようになればそのスポーツを続けるきっかけとなり、よりスポーツを「する」ことが若者の間で習慣化されていくのではないだろうか。また、指導した人たちはこれをきっかけに小学生などに指導をしてみたいという気持ちが芽生え指導者不足などの解消にもつながっていけるだろう。

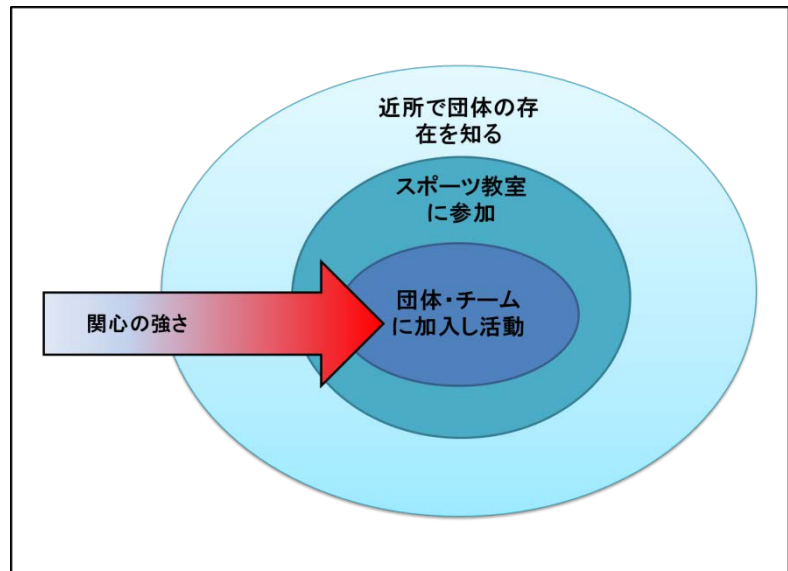


図 10 スポーツ団体・チーム加入させるまでのプロセス

・ おわりに

宇都宮市ではスポーツをすることが習慣化している若者は半数であり、スポーツが習慣化していない若者の理由としてはスポーツを「見る」「する」ことが「気軽に」「身近に」になっていない環境が宇都宮の現状である。この問題を解決していくにあたって、既存の施設をより有効に使い施設の利便性を高めるほかに、プロスポーツチームを身近に感じる機会の創出から、スポーツ教室に参加することによりスポーツすること本来の「楽しさ」を形成していくことが若者のスポーツをより「もっと気軽に、もっと身近に」な物へと変化していくきっかけとなるだろう。